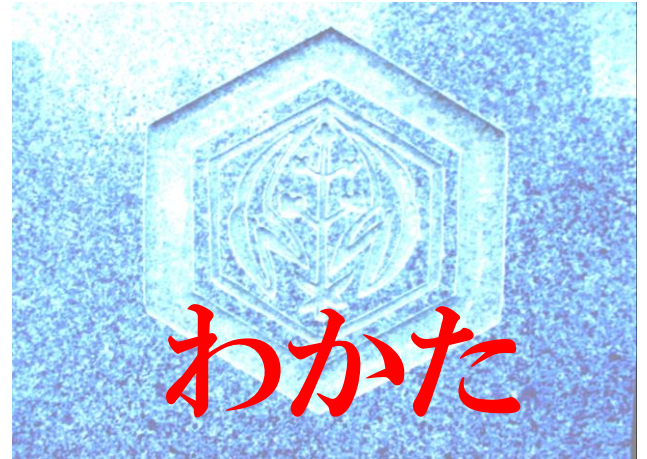


唐丹の民話・1話「大石地区」

大石の

金持ち



平成18年10月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

## 目 次

### —大石の金持ち・わかた—

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. 昔、好況の大石の情勢	4
(1) 戸数・人口 (明治44年4月)	4
(2) 小学校設立 (明治5年学制領布)	4
(3) 鯉漁船数 (明治13年)	4
(4) 鯉節製造場数 (明治13年)	4
2. 屋号は「上方・わかた」	5
3. お嫁さんは花魁	5
4. 商いますます繁盛	6
5. 「おもわく」は思惑どおり往かず	6
6. 孫太郎惨殺される	7
7. 犯人とは露知らず	7
8. 往時の証し盛岩寺にあり	8
9. 他の地でも人柄が偲ばれる人物	9

## 唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び、その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いと思います。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人となられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「大石の金持ち・わかた」は、釜石民話第1集「大石の金持ち」と第2集「伝説と史実『わかた』の殺された若い衆の後日譚」を集約して再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

### 第1集「大石の金持ち」

大石に屋号が「わかだ」というかねもちの家がありました。その家の主人は働き者で、船もなんそうもあって「すいふ（かこ）」も使い魚加工屋をいとなんでいました。毎日のように鮫や鰹がとれて、かまぼこ、ちくわ、鰹節を製造して、江戸に船で運んで売りさばいていました。主人公は慈悲心の強い人で部落民のしんようもありました。

江戸へ製品を積んで何度も航行しているうちに花魁となじみになり連れて帰ってきました。奥さんの花魁はもとは公家の娘で、教養もあって和歌を詠み風流をたしなみ幸福な日々でした。

その後「わかだ」は商売も順調になり金持ちとなって、高台に大きな家を建てました。明治29年6月の大津波には、家が高台のために被害がなかったので、被害を受けた部落民を救済して、部落民に感謝されました。

花魁の実家の人々が、津波の見舞いに訪れて「わかだ」の金持ちに驚嘆して、

良い話を持ちかけました。それは「おもわく＝株券のようなもの」というものに、巨額の金を出したのです。ところが、なかなかその金が返らず、年ごとにどんどん落ち目になり、たてなおそうとあせる程に商売もうまくいかず、花魁は主人に申し訳なくなって、東京に帰ってしまったのです。

使用人の中に孫太郎と言う人がいて、主人思いの若者でした。その当時、盛（現大船渡市）税務署に税金を納めに風呂敷包みを背負ってあるいていったのです。ある日、お金を持っていなかったけれども、相変わらず風呂敷包みを背負って行き、途中の街道（旧浜街道）で強盗に出会い殺されてしまいました。その孫太郎の墓は、今も街道の道筋に建っていて、心ある人々に拝まれているそうです。

大石では「わかだ」の家は（かまけった）といますが、今は大船渡で代も三代ぐらい変わり、商売もかわって今の人たちは平穩に暮らしているそうです。

大石にあった立派な家は解体して、小白浜盛岩寺の庫裏に活用され、家の守り神の観音様も境内に祀られています。

大石の人びとの間には、義理人情に厚かった「わかだ」の話が民話のように語り継がれて行くことでしょう。

## 第2集「伝説と史実『わかた』の殺された若い衆の後日譚」

昔、気仙郡の郡役所をどこにしようかと此の地方の人々は協議しました。候補地は高田と盛にしたときに、大石の「わかだ」では莫大な金を出して盛にしたということだ。そのために、高田？（盛）に祭典があれば必ず招待されということである。

当時、税金を納めに行くには、「わかだのしるし」入りの風呂敷に金子や書類を包み背負って歩いて行ったものだという。

或る日も、若衆孫太郎は出かけた。綾里をすぎ、盛の近くで追剥（は）ぎに出合い殺されてしまった。その日は金を持っていなかった。殺したならず者は、根白（こんぱく）の小川で小刀や血のりを洗って大石に着き、孫太郎の主家「わかだ」にとまったという。「わかだ」では孫太郎を殺した男とは知らずに泊めて、翌日本郷に行くというので船で送ったということだが、本郷の代官で捕まり処刑されたそうです。その時、役人に「言い残すことはないか」と言われ、言った言葉は「孫太郎殺してみたが金はなし、今日までの命は槍で一突」といって無念のくちびるを噛んだという事である。

話し手／大石の上野忠三郎さん

原文は、おしまい

## 大石の金持ち「わかた」

昔むかし「わかた」のある大石は、鯉船や加工場が多く働く場所があり、旅（地域外の）の人たちの出入りも多く、近隣にきこえた景気の良い港であったと言われていました。

次の統計は、明治時代の唐丹における大石の位置づけを表したもので往時が偲べれます。

### 1. 昔、好況大石の情勢

#### (1) 戸数・人口（明治44年4月）

◎唐丹：412戸・2030人

○小白浜：151戸・648人

○本郷：74戸・378人

○大石：64戸・375人

○花露辺：37戸・148人

○荒川：37戸・185人

○片岸：21戸・162人

○山谷：18戸・81人

○川目：10戸・57人

#### (2) 小学校設立（明治5年学制領布）

明治6年：小白浜、本郷、大石、釜石に先ず4校創設

#### (3) 鯉漁船数（明治13年）

◎唐丹：15艘

○大石：7艘（わかた上方、したかた下方、丸一、長谷川など）

○小白浜：4艘

○花露辺：3艘

○本郷：1艘

#### (4) 鯉節製造場数（明治13年）

◎唐丹：11棟

○大石：5棟（わかた上方、したかた下方、丸一など）

○小白浜：3棟

○花露辺：2棟

○本郷：1棟



（釜石市誌・唐丹小史資料編より引用）

## 2. 屋号は「上方・わかた」

この大石に、大昔から代々続くといわれる、屋号が「わかた」という金持ちの家がありました。



(「わかた」の元加工場周辺・写真中央手前)

何艘も船を持ち、獲った魚を処理する加工場も営み、そこで、働く水夫(かこ)や職人などをたくさん雇って居ました。

「わかた」では、毎日のようにたくさん獲れる鮫や鰹で「かまぼこ」や「ちくわ」や「鰹節」を加工し、それを帆前船に積んで江戸まで運び商いをしていたのです。

## 3. お嫁<sup>おいらん</sup>さんは花魁

代々「わかた」の主人は、慈悲心の強い人で、部落民の面倒を善くみていたので誰からも信用がありました。



(花魁の絵)

子供たちも、主人を見れば「わかた旦那さん、わかたの旦那さん」と親しみをもって声をかけるのでした。

この頃の主人も、働き者で何度も商いのため江戸などへ航海しているうちに、花魁となり、その花魁を身請け、お嫁さんにして大石につれて帰って来たのです。

お嫁さんは、元公家の娘で教養があり、大石に来て和歌を詠み、風流をたしなみ幸せに暮らしていました。

#### 4. 商いますます繁盛

それから、「わかた」の商いは順調に往き、さらに金も貯まり、高台の広い屋敷に大きな家を建てました。



(元「わかた」の屋敷周辺・写真手前と右側山斜面一帯が路地)

そのお陰もあり、明治29年6月の大津波の被害はなかったのです。

主人は、津波の被害を受けた部落の人たちに隅々まで、手をさしのべ手厚く面倒をみました。この時も、部落の人たちから、大変感謝されました。

#### 5. 「おもわく」は思惑どおり往かず

新聞報道で津波を知り、嫁いだ娘を心配して、東京から見舞いに来た、お嫁さんの実家の人たちは、「わかた」の家屋敷の大きさや商いの繁盛ぶりにすっかり驚いてしまいました。



(おもわく相談中の絵)

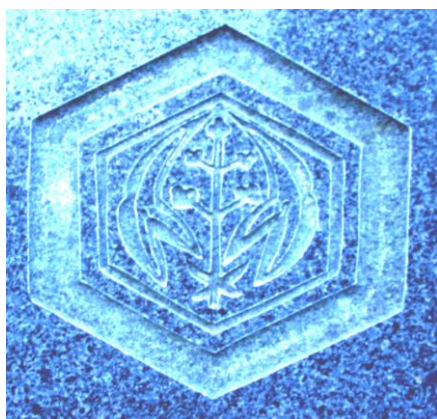
そのため、商いも年ごとに、どんどん落ち目になり、立て直そうとしても、商いはうまく往かず、お嫁さんは、主人に申し訳なく思って、家を出て東京に帰ってしまいました。

そして、主人に金儲けの話を持ちかけたのです。それは「おもわく」というもので株券のようなものです。主人は、その話に、うっかり乗ってしまい、巨万の金を出したのです。ところが、儲けは勿論、出した金も戻ってきません。

1～5の話は、おしまい

## 6. 孫太郎惨殺される

話はかわり、「わかた」に孫太郎という主人思いの若者が働いていました。主人からの信頼も厚く帳場も任され、盛（現在の大船渡市）の税務署に、税金を納める時は、お金や書類を「わかた」の印入りの風呂敷に包みを背負って、用心にお供を連れて行くのでした。



（「わかた」の家紋）

このような「わかた」の印が目につけば、世間一般の人々は、即、「わかたの金持ちがゆく」と認めるほどでした。

ある日も、孫太郎は、主人に用足しを言いつけられ「わかた」の印の入った風呂敷包みを背負って出かけました。

この日は、お金は持たないので一人でした。越喜来を過ぎ盛町近くの立根で「追いはぎ」に遭い、首を絞められ、そして斬り殺されてしまったのです。

## 7. 犯人とは露知らず

孫太郎を殺した、ならず者たちは、根白の小川で着物や小刀の血のりを洗い大石に行き、何食わぬ顔で「わかた」に泊めてもらいました。

つぎの日、「わかた」の主人は、孫太郎を殺した犯人とは知らずに、ならず者たちの頼みを受け、舟で本郷まで送りました。

このならず者たちは、本郷の代官所で捕まりました。処刑される前に役人に「言い残すことはないか」と言われると、「孫太郎殺してみたが、金はなし今日までの命は槍で一突」と言って、くちびるをかみしめたということです。



（孫太郎のお墓）

孫太郎の墓「徳峯義賢信士・俗名孫太郎・明治三巳年」は、今でも街道の道筋にあって、心ある人々に拝まれています。

6～7の話は、おしまい



## 8. 往時の証し盛岩寺にあり

今は、「わかた」の家はありません。が、大正2年4月1日の唐丹の大火で灰と化した盛岩寺の庫裏として移築。総檜造りの書院などに気仙大工の匠の技が随所に見られます。



(移築された元「わかた」の庫裏の書院)

また、「わかた」には住職もいて、守り神の阿弥陀仏様を祀り、時節には、部落の人たちに説法なども行ったお御堂も、同じく盛岩寺に移築。増築などして観音堂として復興されました。堂の欄間には、龍と鳳凰の透かし彫りに極彩色が施され、往時の「わかた」が彷彿されます。



(龍の透かし彫りの欄間)



(鳳凰の透かし彫りの欄間)



(観音堂として移築された元「わかた」のお御堂)

8の話は、おしまい

## 9. 他の地でも人柄が偲ばれる人物

藩政時代初期は、仙台に近い今泉（高田）に代官所と大肝入会所が置かれ、ここが気仙郡の政治、経済、文化の中心でした。



明治9年、気仙郡の所轄が幾度か紆余曲折の末、岩手県に置かれ、気仙郡の郡役所を建築する話が持ちあがり、この地方の人たちは、それぞれの地元が有利になるよう誘致合戦にしのぎをけずりました。

(気仙郡大肝入吉田家)

協議の結果、県の中心盛岡方面への便利さと盛住民の金銭と土地の寄付などによる熱意と心意気。そして、唐丹の豪商上野與惣治・「わかた」の建築用材の寄付による気風のよさなどにより盛に建築がきまり、10年後の明治22年に完成しました。



盛町役場として使われたころの写真

(郡役所の建築物。その後盛町役場となる)

そのことにより、地元盛りからも大変感謝され、盛にお祭りなどがあれば、かならず、招待されたそうです。



(気仙郡役所跡周辺)

この大石の金持ち「わかた」の話は、商いがうまくいったころの話です。が、大石の人たちの中には、義理人情の厚かった「わかた」の話は、民話のように語り継がれて行くことでしょう。

9の話は、おしまい

1～9まで、おしまい

◎釜石の民話・第1集：大石の金持ち

・第2集：伝説と史実3

・「わかた」の殺された若い衆の後日譚を「大石の  
金持ち・わかた」として集約編集とした。

○話し手：上野忠三郎さん／大石

○聴き手：加藤ムツさん／片岸

●再話著者：高橋昌子／小白浜地区（唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ）  
：新沼 裕／本郷地区（同上）

●写真撮影者：新沼 裕（同上）

●校正指導者：新沼 裕（同上）

●再話完成：平成18年10月